

個の実態に応じ、一人一人の考える力を伸ばすことができる授業を目指して

～第2学年「かけ算」の実践から～

小千谷市立南小学校 教諭 田川 諒子

I 授業改善の視点

一斉学習の中で、算数を苦手と思っている児童にとって、課題を提示した後にすぐに自力解決をすることは、なかなか難しい。だからと言って、解決の方法を丁寧に説明しすぎてしまうと、理解が早い児童の意欲を低下させたり、力を伸ばせなかったりするなどの問題が出てくる。そこで、理解度の違う児童一人一人の考える力を伸ばすことを目指して本実践に取り組んだ。ここで言う「考える力」とは、自ら問題意識をもって進んで考える力のことである。授業改善の手立ては、以下の3点である。

1 課題解決の見通しをもたせるための工夫

(1) 導入のスキルアップタイムを活用する

本校では、授業の最初（5分間）に、基礎基本の力をより定着させるためにスキルアップタイムを位置づけている。かけ算の単元では、フラッシュカードに書いてある「●」の数をかけ算九九を使って瞬時に数えるという活動を行う。この活動を通して、「同じ数ずつ表されている図→かけ算で数える」という意識づけを行い、本時の学習活動への見通しをもつ手立てとする。

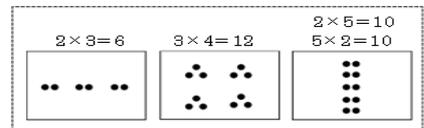
(2) 問題を児童の生活に身近なものにする

生活科でヤギの飼育を経験し、少し前にお別れ会をしたばかりであったため、「お別れをしたヤギのマロンに会いに行くときのバスの座席の座り方を考える」という問題にする。問題を児童の生活の身近なものにすることで、問題場面をとらえやすくさせるとともに、解決に対しての追究意欲の高揚を図るようにする。

2 個の実態に応じた学習活動の展開の工夫：「グループ→個」

課題提示をしてから、「グループ→個」と活動を展開していく。最初にグループ活動を取り入れる。そうすることにより、どのように考えればいいのか分からない児童は、分かる児童の考えを聞いたり、一緒にやってみたりすることで、やり方を理解することができる。同時に、分かる児童は自分の考えを説明することで、より考えを深められると考える。

次に、個人の活動にうつる。ここでは、それぞれが自分のもっている力にあった取組をすることができるようにする。すでにやり方が分かっている児童は、何通りもの方法を考えることで、より九九を使いこなして考えられるようになる。グループでやってみてやり方が分かった児童は、そのやり方を使って自力で解決することができると思われる。



〈図1:スキルアップタイムで用いたフラッシュカード〉

II 実践 単元名 「かけ算（4）」

1 課題解決の見通しをもたせるための工夫

(1) 導入のスキルアップタイムを活用する

単元を通して、フラッシュカードに書いてある「●」の数を、九九をつかって瞬時に数える活動を行った。繰り返し行ううちに、「九九を使えば、もっと速くしても何個も分かるよ。」と、瞬時に数を捉えられる九九のよさを実感していた。そのため、課題に対して「同じ数ずつのものは、九九を使って解決しよう」という意識を高めることができた（図1）。

(2) 問題を児童の生活に身近なものにする

3次では、以下のような問題を提示した。

19人でマロンに会いに津南に行きます。バスの座席は3人がけと2人がけがあります。1人ぼっちを作らないように座るには、どんな座り方がありますか。

その際、児童の口づきが変わり、「やるぞ。」という意欲と、わくわくとした表情が見られた。難易度の高い発展問題であったが、児童の生活に身近で、中で



も一生懸命世話をして、児童の思いが強い「マロン」に関する問題にしたため、全員がすぐに問題場면을把握することができた。

2 個の実態に応じた学習活動の展開の工夫：「グループ→個」

解決にあたり、「1つずつ図に丸をつけていこう。」と予測していた児童が、グループで活動することで、級友の考えを聞き、「今は $2 \times 5 = 10$ で10人座っているね。」と、九九を使って人数を確認していた。中には、座席に座らせた人数から、残りの人数に着目して考えていたグループもあった。「 $2 \times 8 = 16$ で、残りは $19 - 16 = 3$ だから3人席に1列で、ぴったり座れるよ。」と、図に示しながら級友に説明していた(写真1)。日頃から、グループ活動の際の約束事「2人がわかって、1人をおいてきぼりにしない」「全員が分かるまで話し合う」を意識させていたため、グループ活動の際、分からないまま困っている児童はいなかった。



グループ活動後に、各グループの考えを発表する場を設けた。グループの3人が前に出て、1人ずつ順に発表した。1人目「 $2 \times 2 = 4$ で4人乗れて。」、2人目「 $3 \times 5 = 15$ 。」、3人目「 $4 + 15 = 19$ です。」という発表であった。他のグループも、同様の形式で自分たちの考えを発表した。

その後の個の活動では、19人を20人に変えた問題を出題した。グループで考えた方法を使って、黙々と自力解決をする姿が見られた(写真2)。残りの数や、2の段、3の段の数に注目するという「コツ」を見つけて何通りもの方法を見つけることができた児童もいた。中には、何も書き始められず、止まってしまっていた児童も数名いたが、「○を書いていってごらん。」「今、何人座っているかな。」と助言すると、図に○を書いたり消したりしながら考え始めた。そして、人数を確認する際には、九九を使って考えるなど、それぞれが、自分のペースで課題に取り組むことができた。学習後には、「他の方法も見つきたい。」と言って、問題を家に持ち帰る児童もたくさんいた。

III 成果と課題

- 「かけ算を使って考えよう。」という姿が見られたのは、スキルアップタイムで、「九九を使うと、瞬時に数がわかる。」という九九のよさを感じさせることができたためだと考える。
- 児童の生活に身近で、取り分け児童の思いが強い内容を問題にしたため、全員がすぐに問題場面に興味を示し、内容を把握することができたと考え。そして、問題を解決しようという意欲を高めることにもつながった。
- グループ活動を先に行うことで、全員が課題解決の見通しをもつことができた。その後の個の活動では、グループで考えた方法を使って自力解決する姿が見られ、「1人でできた。」という満足感が窺えた。
- ▲ 「九九を使って人数を確認する姿」はたくさん見られたが、「九九を使って考える姿」は少ししか見られなかった。グループの考えを発表する場で、式や数を言うだけの発表にしてしまったことが原因だと考える。考え方の道筋がわかるような発表(例：「まず最初に $2 \times 2 = 4$ で4人乗ると、残りが $19 - 4 = 15$ になる。15は、3の段にある数字だから…。」)にするために、教師が「どうして 2×2 をしたの。」と式に至るまでの考えを聞くなどの工夫が必要であった。